

# 西トップ寺院の建築調査

## —2008年度の成果—

**調査作業の経緯** 建造物研究室では2006年度より西プラサート・トップ寺院（以下西トップ寺院）の建築的調査を継続しておこなっている。調査では、修復をおこなう場合の基本資料となりうる図面の作成、建物の特徴と歴史の変遷の解明、建築当初の復元検討をめざす。これまで、2007年1月に予備的調査、2008年1月には基壇下部の実測調査を実施している。

今年度の調査は2008年8月におこない、実測調査による基本図の作成と、観察による基本データの収集を主目的とした。実測調査は、外周ラテライト列の平面図の作成と、『紀要2004』掲載3D図面を下図とした立面図の修正および中央祠堂中成基壇・南北塔の石材の寸法実測をおこなった。中央祠堂の補強が実施されていなかったため、中央祠堂の実測調査は次年度におこなうこととした。この他、類例調査として、バンテアイ・スレイ、バンテアイ・サムレ、東プラサート・トップ寺院、以上の観察調査をおこなった（図20）。

**破損状況** 2008年5月、大雨により中央祠堂東面の伐採木が転落し、同時に約40石が転落した。2003年前後に伐採した木が枯死し、支持力を失った結果、転落したものとみられる。転落部位は、東正面の妻を形成する石で、全体のバランスには影響は少ないと考えられる。ただし、東面突出部屋根を形成する3石が片持ちでバランスを保つ状態で、崩落の危険が残っていた。

調査時に確認した破損状況は以下のとおりである。東面上部に食い込んでいた木の根が残存し、石に絡みなが

らも目地を押し開いており、変形の一因をなす。特に東面から南面東半部でその傾向がみられる。南面リントル（装飾楣石）東半部が、開口部楣石上を滑り出し、転落寸前である。南面リントルは西トップ寺院で唯一転落せず遺存しているもので、転落・破損の回避が特に必要である。西面主体部は北半部を早くに失っており、南半部の迫出部のみ残存しているため、北へ転びつつある。それに引っ張られて、南面西半部が北西に転び、西面と南面が時計回りに回転している（図22）。

このように、中央祠堂を中心にさらなる崩壊の危険性があるため、急遽崩壊を防止するための補強を実施することとなった。2008年12月にはJSA（日本国政府アンコール遺跡救済チーム）による鋼管足場の設置と補強が実施された（図23）。変形の激しい中央祠堂上部や転落の危険性が大きかった3石も丁寧に補強され、崩壊の危険性は少なくなった。なお、補強方法に関しては、JSAの一員として参加中の早稲田大学大学院教授新谷眞人氏（建築構造学）による助言を得た。

**建築的特徴** 未整理の部分が多いが、観察によって得られた西トップ寺院の建築的特徴を述べる。

西トップ寺院は、一般的なクメールの宗教建築と同様に、切石を積み上げてつくる組積造であり、屋根は「迫出し構造」と呼ばれる疑似アーチを用いる。

石材は、堂塔本体と基壇の表面は灰色砂岩、基壇は内部にラテライトを使用し、中央祠堂上成基壇では内部のラテライトに化粧線形が確認できる。中央祠堂屋根部分にはラテライトや紅色砂岩の混入がみられる。中央祠堂、南北両塔で石積みの方法が異なる。使用する石材が小さく、石積みの目地が通る点が西トップ寺院の特徴である。

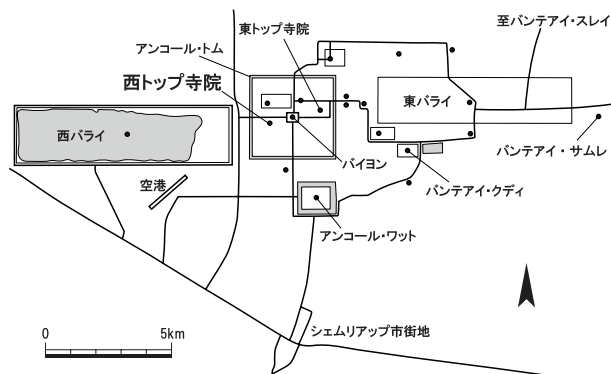


図20 西トップ寺院と他の遺跡の位置



図21 中央祠堂全景



図22 中央祠堂頂部の破損状況

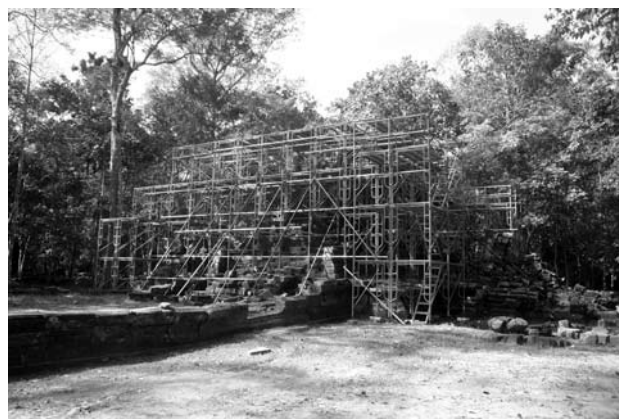


図23 鋼管による補強



図24 開口上部の比較（左：西トップ寺院、右：バンテアイ・スレイ）

中央祠堂の迫出し構造の部分が長い点も特徴としてあげられ、内部では屋根より下の部分から連続して迫出しているように観察される。

中央祠堂の平面形状は矩形の四方に前室がつく十字形である。開口部は紅色砂岩を用い、側支柱と楣材で補強し、リントルと装飾側柱の彫刻はバンテアイ・スレイ様式である。実際には開閉しない石造の扉、いわゆる偽扉は存在しなかったようである。クメール石造建築には内部に木製の天井が張られていたと考えられるものがあるが、西トップ寺院には該当する痕跡は見られない。

**類例調査** バンテアイ・スレイは、967年に作られたヒンドゥー教寺院で、アンコール遺跡群の北東約40kmに位置する。比較的小規模な寺院ではあるが、紅色砂岩とラテライトを多用し、特に破風・楣石・柱・壁・偽扉など紅色砂岩に施された彫刻は精緻かつ洗練されている。側支柱と楣材による開口部の補強方法や仕口、収まり、リントルと装飾支柱に施された彫刻の様式など、開口部の仕様に西トップ寺院との類似点がみられる（図24）。

バンテアイ・サムレはアンコール・トムから東に約

10kmに位置する、12世紀初頭に建てられたヒンドゥー教寺院である。中央祠堂の平面形状は矩形の四方に前室がつく十字形で、平面形状の比較対象とした。

**今後の調査** 2009年度は、鋼管による補強がおこなわれ、中央祠堂の実測調査が可能となったため、引き続き基本データの収集・整理を進め、同時に、仏像台座および中央祠堂東面階段の改造過程、中央祠堂・南北両塔の石積み技法などの検討を予定している。また、周辺類例調査を進めながら、西トップ寺院の建築的特徴とその位置づけを明確にしていきたい。

今年度調査では澤田知香氏（奈良女子大学）に調査の協力を得、クメール建築に関する多大な教示を受けた。謝意を表する。

（番 光・大林 潤）

#### 参考文献

- 片桐正夫『アンコール遺跡の建築学』連合出版、2001。
- 重枝豊『アンコール・ワットの魅力 クメール建築の味わい方』彰国社、1994。
- 片桐正夫・崔炳夏・三輪悟・高橋正時・石津菜央・香川正子・片町健「クメール建築の開口部とその施工技術について（1）～（7）」『日本建築学会学術講演梗概集』1999～2000。